

# シモンというキレネ人

ルカ 23 : 26 - 27



司祭 ヨハネ 井田 泉

2016年3月20日

復活前主日

奈良基督教会にて

「人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。」ルカ 23:26

イエスは、自分のかけられる十字架の横木を負わされて、死刑場ゴルゴタへと進んで行かれました。そこへシモンというキレネ人が通りかかりました。「クレネ<sup>びと</sup>人シモン」というほうが聞き慣れている方もいらっしゃると思います。

キレネというのは、北アフリカの、エジプトよりさらに西、今のリビアにある、地中海沿岸の都市です。ここにもユダヤ人がたくさん住んでいました。はっきりしたことはわからないので想像ですが、彼、キレネに住むユダヤ人であるシモンは、過越の祭のためにエルサレムに来ていたのかもしれませんが。

彼シモンは、イエスがゴルゴタへと進み行くところに出くわしました。群衆にまじって、彼は見ていました。その男が目の前で倒れました。担いでいた太い木が横にころがっています。死刑に処せられる犯罪人は、自分がかげられる十字架の横木を担がされて死刑場まで歩かされるのです。護送のローマ兵たちがどなっています。

「早くしろ！」

コツンと何かシモンの肩に当たりました。振り向くと、ローマの兵士が槍で自分の肩をたたいていました。逃げられません。シモンは倒れている男の横に転がっている太い木を、無理やり担がされました。

倒れていた男は引き立てられて、よろけながら前に歩き始めました。その後ろに続いて進むように、ローマの兵士がシモンに指示します。

歩くうちに木が体にめりこんでくるように重くなってきます。それに耐えながら、シモンは前に行くイエスを見つめます。シモンはこの男について、預言者だとかラビだとか、神の子だとか、だれかが言っているのを聞いたことがありました。それがこんなみじめな姿をさらしています。

服は破れて砂だらけ、髪の毛は乱れ、汚れて見苦しい。鞭で打たれたらしい傷が破れた服の間から見えて、あちらこちらに血のかたまりがついている。一体この男は何をしたのか。一体この男は何者なのか。どうして死刑と決まったのか。シモンは、前に行く男をじっと見つめながら、その後ろに従って行きました。

「おまえはキリストではないか。それなら自分を救ってみよ！」。大声でイエスをののしる声です。嘲りやののしりの声は、やがてシモンにも浴びせられるようになりました。まるで自分までこの男の仲間か同類でもあるかのようにののしる奴がいる。

ちがう！ 自分はこの男とは何の関係もない。無理にこいつの十字架を担がされただけだ！ 何の関係もない。

しかし嘲る人ばかりではありませんでした。悲しみ嘆いている女たちの大きな群れがついてきました。

やがて門をくぐって城壁の外へ出て、ようやくゴルゴタに着きました。シモンは重荷から解放されました。もう用はないのです。

すぐに彼はそこを立ち去ったのでしょうか。それとも、刑の執行を群衆の間から見ていたのでしょうか。シモンが担いできた横木が、すでに立てられてあった柱に打ちつけられました。そして、イエスはその木に打ちつけられました。

シモンのことを思っていると、ふと気がつきます。十字架を負って主に従う、というのはこの人のことではないか！ たとえ強いられたにせよ、彼は「主に従う」というキリスト者の姿を文字通り現しています。

その後のシモンというキレネ人については何の記事もありません。

ただひとつのことに触れておかねばなりません。

ルカ福音書にはただ「田舎から出て来たシモンというキレネ人」と書いてあるだけなのですが、同じシモンについてマルコ福音書はこう記しています。

**「アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人」  
15:21**

こうマルコが書いているのは、マルコ福音書の最初の読者がシモンについて「ああ、あのアレクサンドロとルフォスとの父親か」とわかるからなのです。

ということは、おそらく、イエスの十字架を無理に担がされ

てイエスの後に従ったシモンのふたり息子アレクサンドロとルフォスは、父とともにイエスを信じて最初の教会のメンバーになっていたのではないのでしょうか。

イエスが十字架にかけられて死なれてからおよそ 50 日後の日曜日、イエスを信じて集まっていた人びとに聖霊の火が<sup>くだ</sup>降って、最初の教会が誕生しました。その日、ペテロの説教を聞いた人びとの中には、キレネから来た人がいたと使徒言行録は伝えています (2:10)。

キレネの人シモンは、ペテロの説教を聞いて回心し、その家族とともにイエスを信じて教会に加わったのではないか。想像なのですが、そのように思えてきます。

もうひとつ、あるいはつながるかもしれない聖書の箇所があります。パウロの書いたローマの信徒への手紙の終わり挨拶の中にこう書かれています。

**「主に結ばれている選ばれた者ルフォス、およびその母によるしく。彼女はわたしにとっても母なのです。」 16:13**

ルフォスというのは珍しい名前だそうです。このルフォスはシモンの息子かもしれません。キレネ人シモンの妻と、その息子ルフォスは、後にローマの教会の忠実な信徒、しかもパウロと大変親しい人となっていた可能性があります。北アフリカのキレネとイタリアのローマとは、意外に遠くないのです。地中海を隔てて南と北です。

今、あえてシモンというキレネ人がイエスを信じる者となったと理解して、三つのことを思います。

第一に、イエスが担がされていた十字架の横木。それを無理に担がされた理不尽な出来事。シモンに強いられた苦難です。しかしそこから彼の新しい人生が始まりました。イエスと共に苦しむ者は、イエスと共に復活の命に生かされます。

第二に、十字架を負わされたシモンは、受難のイエスを見つづけました。イエスの姿は彼の内に刻まれ、そこから彼の深いところからの変化が起こりました。イエスのゆえに重荷を強いられたシモン。彼は、嘲られ、ののしられ、苦しみを受けて死なれるイエスを見つめつづけ、そして十字架と復活のイエスに導かれた。逆に言えば、あの不当な苦難をとおして、イエスは彼をご自分のもとに引き寄せられたのです。

第三に、彼シモンがイエスと深く出会ったことから、イエスの福音は家族に、周りに広がっていきました。

わたしたちも不当な苦しみを強いられることがあるかもしれませんが。それがただ否定的なことでは終わるのではなく、そこからイエスを見いだすことができますように。イエスを信じて光を浴びる人生が始まりますように。

祈ります。

主イエスよ、わたしたちはしばしば、わたしたちが求めたのではない重荷を、わたしたちが負いたくはなかった労苦を負わせられて苦しみます。けれどもその重荷と苦しみをとおして、みもとにわたしたちを招いてください。わたしたちが、重荷を負いながら、あなたをはっきりと見つめつづけることができるようにしてください。自分の十字架を負ってあなたに従うことができるようにしてください。そうしてその十字架を、あなたの栄光と、人々の救いと、そしてわたしの救いのために用いてください。わたしたちのために苦しみを忍び、十字架に死なれあなたの御名<sup>みな</sup>を賛美します。アーメン